

第四章医学に貢献する室賀一族では、室賀・土屋家の医師として活躍した人々をくわしく紹介している。ここではその名前と役職・続柄等を簡単に記しておこう。

室賀不二男 録郎の三男、元都立豊島病院長。

土屋健三郎 国太の次男、元産業医科大学学長、公衆衛生学。

土屋武彦 国太の三男、産業医科大学名誉教授、放射線医学専攻。

村上泰二郎 国太の長女の夫、武彦の同窓生、清水市で耳鼻科開業。

筧 繁 録郎の長女栄子の夫、入沢達吉の高弟、千葉医科大学教授、待医、内科。

筧 弘毅 筧繁の長男、千葉大学名誉教授、日本放射線医学の開拓者。

筧 潤二 筧繁の次男、医師、ピアニスト、日本大学教授（音楽）。

室賀昭三 録郎の次男靖雄の末子、前日本東洋医学学会会長。なお一部の方は割愛し、経歴はすべて省略したが著者との関係などエピソードを語り、興味の深い紹介である。

とにかく本書は肩のこらない、しかも医史学的に関心の深い本である。

（土屋 重朗）

〔西田書店・東京都千代田区神田神保町三一一〇、電話〇三一一三
二六一―四五〇九、一九九二年八月発行、二、〇〇〇円〕

山本俊一著『日本らしい史』

人に歴史があるように、病にも歴史がある。かつては獵けつをきわめた病も環境の変化や治療薬の登場によって屈伏され、忘れ去られるものもあれば、風邪のように、いつまでも寿命をながらえているものもある。病の生活史、それはまた豊かな個性をそなえたものである。

ハンセン病は少なくとも日本においてはまもなく消え去ろうとしている病のひとつであるが、この病の歴史ほど強烈な個性を有したものは他にないであろう。古代以来、この病に襲われた者は正に生きながらの死を体験させられている。ケガレた者、仏罰・神罰を受けた罪人と意味づけられ、それゆえに人であつて人に非らざる非人と前近代社会では位置づけられた。病者は病苦に加えて社会的な死を宣告され、乞食の生活を余儀なくされていたのである。

近代国家のハンセン病への取組みは、条約の改正により外国人が内地に雑居する段階に至つた明治末にはじまる。欧米ではすでに消滅していたハンセン病がわが国に存在することを恥辱と考えた政府は、浮浪患者の徹底した隔離政策をとるようになる。それまでは欧米のキリスト教宣教師らが中心となつたハンセン病施設がわずかに営まれていたのに過ぎなかつた。アメリカの排日政策への反発と日露戦争に勝利した大
国意識が国公立の療養所建設を推進させる原動力となり、在

宅患者の収容を含めた無ライ県運動へと進む。だが、そこでは病の伝染力が必要以上に誇張され、人々の恐怖心を利用した強制収容のあたりがとられた。患者の人権を無視した療養所生活は戦後までつづき、今日でも隔離によってハンセン病を撲滅させようとする政策が継承されており、退所者に対する保障は全く考慮されていない。

著者は近現代におけるハンセン病の歴史を、一九〇七年の「らい予防に関する法律」の制定から一九三一年公布の「らい予防法」、さらには一九五三年の「らい予防法改正」の成立に至る国会での審議過程を議事録などによって詳細にあとづけ、その当時の状況を生き生きと描き出している。委員らの質疑応答・証言を巧みに挿入し、臨場感のあふれたものになっているが、さらに興味を持って読めるものにするには、それから法律に裏付けられた医療・衛生行政が患者に何をもち、どんな意味が新たに付与されることになったのか、患者側（患者を出した家族や村を含む）の史料あるいはマスコミの記事などをもって、患者や家族の生活を浮き彫りにした章節が加えられる必要があると思われる。

なお、救済事業が皇室の慈悲的性格を帯び、天皇制護持の一翼を担わされていたこと、ハンセン病者の断種が日本民族の浄化をめざす優生政策に結びつけられようとしていたことなどの点については、藤野豊著『日本ファシズムと医療』（岩波書店、一九九三年一月刊、六七〇〇円）が意欲的に取組んでおり、癩の社会的な意味と患者の生活にふれた沢野雅樹著

『癩者の生』(書弓社、一九九四年一月刊、二六七八円)も刊行されているので併読されることを願う。いずれの書もたいへんな労作であり、これらによってわが国におけるハンセン病患者の実態だけでなく、近現代における医療政策の立案過程と基本姿勢が明らかになったことは大きな収穫である。

(新村 拓)

〔東京大学出版会・東京都文京区本郷七―三―一東大構内、〇三一三八―一―八八一四、一九九三年一月刊、A5判、三五六頁、八七五五円〕

蒲原 宏著『新潟県医学史覚書』

本書の最初に書かれている「はじめに」を読んでみると、本書の成り立ち、すなわち著者が幼少の時代からいかに歴史の重要性に興味を覚える環境に育ったかが詳しく記されている。しかし環境がいかに良くても、これを受け入れる態勢を整わなければ単なるあだ花に終わってしまう。著者はこれらをうける意欲と人一倍の向学心があったため、立派に開花する結果となった。医学生時代から医史学に興味を覚え、整形外科を専門としてからは、該科と郷里の新潟関係の医学の歴史には特に意を用いるようになり、数々の著書や論文を出されたことは人皆の知るところである。

本書は著書名が「覚書」と明示されているとおり、内容は十八項目、百六十余篇の「おぼえがき」から成り立っている。